# 「ことばの知恵」を超えて

## 同行三人

高史明

新泉社

# 「ことばの知恵」を超えて

同行三人

高史明

新泉社

## 著者紹介

高史明　（こ　さみょん）

1932年、下関市に生まれる。在日朝鮮人二世。
1945年、高等小学校を中退後、さまざまな底辺労働を遍歴。政治活動にも参加するが、1954、5年に重い精神的葛藤を体験することになり、自己を問として沈倫。
この頃、一度「歎異抄」を繙くが、やがて文学を志す。
10余年の独学を経て、1970年、最初の長編小説「夜がときの歩みを暗くするとき」を『人間として』に発表、以後作家生活に入る。
1975年、一人子・岡真史が自死。この悲しみが縁となって、改めて「歎異抄」に導かれ、それ以降、親鸞聖人の浄土真宗の教えに帰依してゆくことになる。
著書に、「いのちの優しさ」「一粒の涙を抱きて」「生きることを学んだ本」、「少年の闇――歎異抄との出会い」三部作など多数がある。
「生きることの意味」では、1975年度の日本児童文学者協会の協会賞を受賞。
1993年、第27回仏教伝道文化賞受賞。

**「ことばの知恵」を超えて――同行三人**

1993年8月1日・第1刷発行（初版3,000部）

定価2800円＋税

著者＝高　史明

発行所＝株式会社　新泉社

東京都文京区本郷2-5-12
振替・東京7-160936番　TEL03-3815-1662
印刷・太平印刷　製本・関山製本所

ISBN4-7877-9310-1

# 「ことばの知恵」を超えて

同行三人

高史明

新泉社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

**はじめに**
《永遠のいま》に結ばれて　7

第一章　**星の王子さま**
1　淋しさと星の王子さま　13
2　さあ、もうなんにも思いのこすことはない
3　地理と歴史と算数と文法　36
4　かんじんなことは、目に見えない　46

第二章　**新しい出会いのはじまり**
1　『歎異抄』からの声　61
2　「念仏」とは？　「供養」とは？　75
3　深いいのちの永遠の流れ　90

4　こころの《座》の秘密　104

第三章　人間世界の濁り

1　《涙》は《自然》からの授かりもの　121
2　賢人と愚人の違い　136
3　人間中心と時代の闇　152
4　朝鮮と日本との間の不幸　178

第四章　暗い絵

1　戦後の汚辱を生きて　199
2　マルクスの眼差し　235
3　澄んだ目をした青年の苦悩　261
4　パパは朝鮮人でママは日本人　277
5　《愛別離苦》のはじまり　297

終章　同行三人　321
1　親鸞さまの「三願転入」
2　慚愧という知恵　353
3　自然法爾　365
あとがき　391

# はじめに

## 《永遠のいま》に結ばれて

マーちゃん、こんにちは――。のんびりと日光浴というところかい。おやおや顔に陽光があたっているけど、眩しくないの？　ちょっとお邪魔していいかな――。きみさえよければ、今日は、きみとじっくり話してみたいと思っているんだが、どうだろう。パパの話を聞いてくれるかい？

マーちゃん、早いものできみが世を去ってから、もう十八年の歳月が経っているんだよね。どうかすると、まだ昨日のような気がすることがあるのに、いつの間にか、十八年も経過しているわけだ。きみが死を選んだのは、十二歳のときだから、わたしたちが一緒に暮らしていたときより、それぞれがあの世とこの世とに別れて、厳しい断絶の時を生きることになってからの方が、もう長くなっているんだね。

マーちゃん、きみにとって、この間の《時》はどんな風だったんだろう？　パパの方は……そうだな、パパにとっては、この間、《時》とは、ますます不思議な顔を見せるようになってきている

ような気がする。《時》、つまり《時間》とは、ほんとうに何だろうね。時計の針は、その後も休みなく動きつづけている。それは確かだ。だが、時計の《時》だけが、《時》のすべてではなかったんだよね。人間のこころには、いま一つ別の《時》が流れていたんだ。パパは、この十八年間、時計の時を斜めに見ながら、ずうっとこのこころの《時》と、一緒だったような気がしてならない。この《時》は、ぴったりと静止したままなんだな。あるいは静止したまま、こつこつと動いているという風なんだね。妙ないい方だがそうなんだ。

マーちゃん、きみの死後どれほど経ってからだろう。ある日、パパは深い夜のしじまの底で、このこつこつ、こつこつと動きつづけている《時》に気づいたんだな。こつこつ、こつこつと鳴るその《時》は、こつこつ、こつこつと鳴りながら、時計の時とは逆の方向に進むんだ。後ろにというか、こころのさらなる底の方へと進んでゆくんだね。だから静止しているようにも感じられていたわけなんだ。それは過去からきて、几帳面に現在を刻みながら、刻々に未来に向かってゆく《時》ではないといってよいと思う。不思議なことだが、それは未来の方からくるんだ。未来からきて、過去を刻みつつ、現在を実現させているんだな。ひょっとすると、そのような《現在》こそが、真実の現在なのかも知れないね。ややこしい言葉でいえば、それは《連続の非連続》の時なんだね。《永遠のいま》といってもいい。人間の根っこには、この《永遠のいま》が生きているんだよね。

マーちゃん、きみもまた、いまその《永遠のいま》を呼吸しているのではないだろうか。あの世とこの世の断絶は、絶対的なものだ。にもかかわらず、この断絶には、共に呼吸できる《永遠の



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

いま》があったんだね。だって、その不思議な《時》に気づいてからだ。パパは、遠くへと立ち去っていったはずのきみが、その永遠の彼方から、刻々に帰ってきてくれているような気がしてならないんだな。

だからこそ、パパはこうして今日も、きみとお話ができるというわけだ。この十八年間に、わたしたちはなんと多くを語り合ってきたことだろう。ほんとうにいろいろなことを語り合ってきたんだよね。あるときのきみは、ベビーカーの中にいて、そのまんまるな顔いっぱいに歓びを溢れさせながら、両手を強く打ち振っていた。嬉しいことがあると、どういうわけでか、きみは両手を同時に打ち振っていたんだよね。お風呂をいただいた後、湯上げタオルの上に転がされたときなんか、特にそうだった。きゃっきゃっと歓声をあげながら、手を振るわけだ。そうかと思うと、哺乳ビンを口に含んだまま、うっすらと目を細めてゆき、ふうっと眠りの世界に入ってゆくきみとの出会いも、少なくなくあったと思う。この十八年間は、パパがきみと一緒に過ごした十二年と九か月ばかりの日々を、生き生きと映しだす万華鏡でもあったんだよね。

今日はしかし、いつもとは少し趣をかえて話し合ってみたいと思うんだな。もっとじっくりと話し合ってみたいんだ。きみの生死やパパの無明などともかかわって、人間の抱えている問題を、根っこから話し合ってみたいと思っているんだが、どうだろう。聞いてくれるかい。ぜひ聞いてほしいと思う。

# 第一章　星の王子さま

# 1　淋しさと星の王子さま

マーちゃん、きみはその死後に、一冊の詩の手帳を残していたんだよね。ほら、きみが六年生のときの十二月、それまでの日記帳がいっぱいになったからといって、ママに新しい日記帳を買ってもらっただろう。きみは、その日記帳に日記の言葉ではなく、詩を書いていたんだ。いや、詩というより、折々に頭に浮かぶ言葉を、自由に書きつけたといったものだという方がいいかも知れない。その冒頭の詩は、まことに無邪気なものだった。題からして、『ぼくのおしろ』なんだものね。

ぼくのおしろ

ぼくのおしろは何よりも

とてもりっぱなおしろ
ギターがころがって
ラジオはベッドの上
やぶけたジーンズ
イスの上
ポスターはかべから
わらいかけている
クリスマスにもらった
オセロゲーム
今では色もはげてきました
これがぼくの
おしろの家来です

マーちゃん、きみはこの詩で、きみの部屋のあるがままを書いたんだよね。しかも、遊びごころをいっぱいに溢れさせながらだ。きみがこの詩を書いた頃、わが家は新しく改築されて、きみの個室も急に八畳の広さになっていたのだった。きみがその部屋に移って、部屋の壁に張ったのはアメリカの夭折した俳優ジェームズ・ディーンと、機関車D51の大きなポスターだった。パパたちは、きみの死後もそのポスターを取り去ることができなかったものだ。そのポスターのある



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.